慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	H・E・ノサックの韜晦と表現：『ダルテス事件』を中心に
Sub Title	H.E. Nossack's Self-concealment and expression in Der Fall d'Arthez
Author	赤沢, 元務(Akazawa, Motomu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1979
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.38, (1979. 2) ,p.71- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00380001-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

H・E・ノサックの韜晦と表現

――『ダルテス事件』を中心に――

赤澤元務

（一）

一九六六年にノサックは『Interview mit sich selbst』（自分自身とのインタビュー）という副題をもつ『Bitte kein literarisches Geschwätz』（どうか文学のお喋りは）を発表している。これはインタビューといった形式をとっているものの、副題の示すとおりノサックの自問自答であり、その締めくくりとして、ノサック自身の自己規定の試みともとれる次の問答が最後にきている。

Frage : Mich wundert, daß man Sie nicht für einen Humoristen hält. （あなたがユーモリストだと思われないのはへんですね。）

Antwort : Sagen wir lieber Clown. Aber das riecht schon wieder nach Literatur. （それよりもクラウンと言いましょう。いやそれにしたってもう文学の臭いがする。）[1]

ところでこれより二年前の一九六四年には『Das kennt man』（わかってるわ）が出版されており、ノサックはこの作品の終りの方で登場人物にではあるがこう語らせている。

「きみが――サーカスの人（einer vom Zirkus）になって――ポケットからノートと鉛筆をとりだして、報告書（Bericht）をつ

くるふりをするんだ。それはひどく滑稽に見えるだろうな。人々はさあやつは真理を書きあげるつもりだぞと考えるだろう、そして笑いこけるだろう。あいつがまた何を思いついたことやら！そんなふうにすれば、ぼくらはもう報告書なぞつくる必要はない、ぼくらはそのふりをすればいいんだ。お客の前でお辞儀するだけで充分だ。[2]」（中野孝次訳　傍点引用者）

本論で取り上げる『Der Fall d'Arthez』（ダルテス事件）という小説は製作順からすれば六四年のこの『わかってるわ』そして同年の『ルキウス・エウリヌスの遺書』に続く作品で、出版年は先の問答から二年たった一九六八年である。本論はこの『ダルテス事件』を、そこに見られるノサックの表現方法に的を絞って考察しようとするものであるが、実はこの小説は一種の「報告書」といった体裁をとっており、従っていま紹介した「サーカスの人」の「報告書をつくるふり」云々の言葉は、これを六六年の問答とも考え合わせれば、『ダルテス事件』と何らかの関連があるのではないかと一応推測されるのである。だがこのことは『ダルテス事件』を見ていけばおのずと明らかになってくるであろう。その前にしばらく先の問答にとどまり、ノサックの言う「クラウン」の意味をその問答の範囲内ではっきりさせておきたい。

するとまず問題になってくるのが、「いやそれにしたってもう文学の臭いがする。」という最後の一文である。この文は一見するとたしかに前言を打ち消そうとしているかのようである。が、これはむしろノサックの逆説的表現の現われととる方が正確であろう。というのも、ノサックはある講演でヴィルヘルム・ラーベの文章に見られる後続文（Nachsätze）について、「作家が自分自身に、あるいは読者に向かってこう言いながら手を振っているのが目に見えるようです。――いやいや、ことはやはりそんなに簡単ではありませんよ。涙や情熱では何もできるものではないのです――と。まさに比類なく現代的な身振りです。[3]」（青木順三訳）と語っているのだが、それと同様の「現代的な身振り」がここにも見られるのである。もっともこれは証明しうる性質のものではない。しかしいまこのような身振りを見るとすれば、「クラウン」という語の意味がいく分定限されてくるのではなかろうか。先の問答では「ユーモリスト」では規定できない何かがあって、あえて「クラウン」という言葉が持ち出されている。そしてその「クラウン」とは感情的、感傷的ないわゆる「文学」的なクラウンではないクラウンなのであろう。

またこの「クラウン」は自己規定として使われているから、そのかぎりでは、無意識的に滑稽な真似を演じ傍から道化呼ばわりされる道化を意味しているのでもない。ここで言う「クラウン」は従って道化師、道化役者に近いものであろう。すなわち意識して道化を演じる道化的人間である。そして意識してであるから、これは裏返せば道化役者の仮面に象徴されているように自分の素顔（正体）を隠していること、自己韜晦をしていることでもある。とすると「ユーモリスト」では規定できなかったものが何なのか、「クラウン」という言葉が持ち出された理由もわかってこよう。「ユーモリスト」も「クラウン」も笑いという点ではある程度共通している。しかし「ユーモリスト」は本来人の気質、性格を表わす言葉で、ユーモリストに自分の正体を隠す必要はない。「ユーモリスト」をユーモア作家の意味に解した場合でも同様であろう。しかし繰り返して言えば、意識的なクラウンには仮面のような何かでの、偽装による自己韜晦が欠かせないのである。

とはいえ「それよりもクラウンと言いましょう。」と答えたのは作家ノサックなのであって、作家が「文学」臭のないクラウンとはどういうことか。仮に「作家」イコール「クラウン」という等式を立てるとすると、作家がクラウンのように素顔を隠し、そうしながら作家の書き上げるものが舞台でクラウンの演じる道化の所作に等しく、それが観客を笑わせるように読者を笑わせ、そのための作家の表現方法がクラウンの演技の仕方でもあるということになる。これではたしかに図式的にすぎるし、言語表現と身振り表現という表現方法一つとっても実際両者の違いは大きい。だが括弧付きの「作家」、「クラウン」の次元ではどうか。この等式は成立しなくもないであろう。「作家」、「クラウン」という名辞はそれぞれ概念の広がりをもっており、その外延がたがいに接触したり、重なったりしないとはかぎらない。たとえばノサックがラーベの後続文に「現代的な身振り」を見たということは、それだけ「作家」概念に広がりができ、「クラウン」の概念の方に近づいたというふうにも考えられるのである。このような意味においては、もし作家が言語表現の可能性を活かせば、「偽装による韜晦」と「笑い」によって意識的にクラウンを演じられるのではなかろうか。ただそれにはこの作家すなわちノサックは従来の「作家」概念から離れることにもなろう。『ダルテス事件』では、そこにクラウンが登場するだけでなく、書くという行為においてノサック自身が一種の「クラウン」を演じようとしているらしいのである。

（二）

『ダルテス事件』に登場するクラウンは正確に言えばパントマイムを演じるマイム役者、コメディアンである。しかしノサックがこの人物で「クラウン」を考えていたことは、この小説の巻頭におかれた、画家マックス・ベックマンの次の言葉に明らかである。「このようなクウランをこしらえることは、その誇張された対象性のゆえにひどくむつかしい。」[4] これはベックマンの日記から取られた言葉である。

ではこのマイム役者その他の主要人物がどのように配置されているのか、それを示すために、まず『ダルテス事件』の筋をごく簡単に述べておく。――ある若い司法官試補が国家公安局に勤務しているとき、フランスで、「ダルテス」という偽名を用いていた男（マイム役者ダルテスとは違う）が殺されるという事件が起き、それがきっかけとなってこの司法官試補はマイム役者ダルテスを調査するよう上司から命じられる。この調査のために彼はまずダルテスの友達であるランベールという人物に近づき、そしてこの人物を介してダルテスの娘エーディトとも知り合いになる。そして間接的にだがダルテスに関する情報を得ていく。ところがこの司法官試補は調査を進めていくうちに、逆にランベール、ダルテスに馴染んでか、公安局とそれを代表しているような人物グラッチュケのもとから次第に離れていき、ついには自分の職を捨て発展途上国へ出かけることになる――

『ダルテス事件』はすでに述べたように一種の「報告書」であり、若い報告者（司法官試補）がそれを書いたという仕組みになっている。これは『ダルテス事件』におけるノサックの表現方法を考える際まず問題になってくる。なぜなら、ノサック自身が直接小説の場に乗り出してきて報告を書くのとは異なり、この小説では通常の作家の位置にノサックの姿は見あたらず、若い司法官試補という作家とはおよそかけ離れた、少なくともノサックとは短絡的に同一視できない具体的な一人物が作家の位置に登場し報告を書き始めるのである。ヴィルヘルム・エムリッヒはノサックのこの表現上の意識的操作について、「ノサック自らが完全に自分を破棄してしまい、おまけに自分の小説の製作を若い報告者に押しつける、……」と言い、さらに「こうしてすべてがこのような否定された存在形式の

なかで自らを破棄する。何も己れの場所にとどまっていない。この小説は小説のなかでは非小説（Nichtroman）であり、しかし題とびらでは小説なのである。だれももはやこの小説を書いたことに責任を負っていない、小説のなかでの思考、感情、行為に対してさえも。[5]」とかなり否定的に述べている。エムリッヒのこの批評は正確であるように思われる。若い報告者がどのように報告をしているのかはあとで見るとして、少なくとも形の上からは、「題とびら」のなかの『ダルテス事件』と実の書き手ノサックとの直接的なつながりは、この報告者の登場であらかじめ断たれており、読者の側からの「責任」追求の手は若い報告者のところまでしか届かない。ということは、実の書き手であるノサックがエムリッヒの言うように「小説の製作を若い報告者に押しつける」か、あるいはこの報告者の姿をかりて一種身をやつすかして、ともかく読者の目から姿を晦ましそうとしていることでもあろう。

そしてこれをさらに補強するような形で、ノサックは報告者にこう書かせている。「報告者がダルテスについて知っている、あるいは知っていると思っていることのすべては、国家公安局その他の役所の書類、録音テープ、テレビの番組、……従って間接あるいはそのまた間接からのものである。そしてまさにこのことのゆえに、著者がたんに報告者として登場することはうべなわれるだろう。彼はそうすることで自分の分を守っている、というのも彼は何といってもしばらくの間国家公安局で司法官試補（Referendar）であったわけだし、この肩書きは文字通り報告者（Berichterstatter）でおきかえられるであろうから。[6]」このようなわけで報告者は「報告者」としてとどまる。そして彼によって書かれるものは一応「報告書」（Bericht）ということにもなるのだが、この一節に見られるように若い報告者自らが自分を対象化し三人称の形で「報告書」を書いているため、『ダルテス事件』では実の書き手ノサックと報告者とのあいだにだけでなく、報告者とその「報告」とのあいだにも必然的に何らかの距離が生じてくるのである。別な言い方をすれば、ノサックも、そしておそらくは報告者も「私」（ich）の形で登場することを意識的に避けているため、「報告」自体がいわば宙に浮いてしまっているのである。実の書き手ノサック、若い報告者そして彼の「報告」はこのような「否定された存在形式」によって関係づけられている。そして報告の内容については報告者がじかに聞いたことのほかは、いまの引用文で報告者が述べているとおりであるから、要するに『ダルテス事件』ではすべてが信憑性の薄い、疑わしいものになっており、「報告書」とはいえ読者にしてみれば、確かな報

告は若い報告者からも、だからまたノサックからも直接には得られないのである。もちろん『ダルテス事件』の全体がノサック自身の何らかの表現であることはまちがいない。しかしその表現の仕方が同時にノサックの意識的な韜晦の仕方にもなっているのである。そしてエムリッヒの先の否定的見解とは別に、彼の言葉からすれば、そして文体の問題をひとまずおくとノサックの韜晦は成功しているようである。『ダルテス事件』であらゆることの「責任」の所在がわからないとは、そこでノサックの尻尾は摑めないということである。エムリッヒは「題とびら」のなかの『ダルテス事件』を「非小説」だと言っていた。そうかもしれないし、このような表現態度をとっているノサック自身が、直接的表現を目指す作家の「作家」概念からはみ出しているのではなかろうか。

『ダルテス事件』の報告者とその報告の性質についてはギュンター・ブレッカーがこう述べてもいる。「報告者の気質のなかでダルテス事件に二重にはなばなしく火花を散らさせるチャンスは使われないままでいる。なぜなのか？ あの青年が当局の書類用に報告書を作成するからか？しかし彼は早々と当局から身を引くのだし、自発的に書き続けるし、それに彼は自分の聞知する事柄に自分の存在を振り動かされるように感じるのである。だったら、クラウンの出し物の描写でさえもくどい、いやなものにしてしまうこの灰色の中立、人を寄せつけないこの固苦しさ、この無差別の単調さ、これらすべては何のためか？ ただ一つ推測されうることは、こうしたことすべての原因が素材の特別な制約にというより、作者の側の制約にあるということである。彼（ノサック）の初期の著作の多くを思い起こしても矛盾しないであろう一つの仮定である。」[7]

ここには『ダルテス事件』の「報告書」としての性格が、ただし小説の面白さを殺ぐものとして否定的にではあるが端的に言い表わされている。ブレッカーによれば、『ダルテス事件』では報告者はあくまで報告調の文章を書いており、そこに彼の気質が反映していないだけでなく、報告の文章が「灰色の中立」、「無差別の単調さ」におおわれている。ところでもし報告の文章すなわち『ダルテス事件』の地の文章がブレッカーの言うような性質のものであるなら、それは報告者の文章から彼の気質を通じて、実の書き手であるノサックの気質、文体に現われる彼の表情を窺い知ることができないということである。言い換えれば、ノサックが自分の文体に圧力を加え、それを変形させるような書き手「報告者」を登場させ、その「制約」のなかで報告調の無表情な地の文章を書いているということ

である。おそらく小説としての面白さを犠牲にしてまでノサックはこのような表現をしているのである。ブレッカーは慎重な言い方をしている。しかし彼がここで提出している疑問は彼の推測通り、ノサックの偽装、韜晦ということで解決がつくように思う。一見「報告書」ふうの『ダルテス事件』の「灰色の中立」、「無差別の単調さ」が実はノサックにとって彼の素顔をおおい隠すための、一種仮面の働きをしているのである。

だがブレッカーの文章からの逆証明だけでは論拠として不十分であろうから、報告者がどのような文章を書いているのか、以下に実例をあげてみる。

「Herr Oberregierungsrat Dr. Glatschke war natürlich ein viel zu geschulter Beamter, als daß man seinem Gesicht auch nur die geringste Überraschung über die Antwort hätte anmerken können. Der Verfasser dieser Aufzeichnungen war bei dem Gespräch nicht persönlich anwesend, sondern befand sich, mit Kopfhörern an den Ohren, in dem kleinen dunklen Raum, in dem solche Verhöre auf Band aufgenommen wurden. Trotzdem rechnete er geradezu damit, daß Herr Dr. Glatschke an diesem Punkt mit einer weiteren, sei es auch noch so beiläufig gestellten Frage nachfassen würde. Es hätte ja genügt, die Augenbrauen hochzuziehen und amüsiert zu fragen:〉Unvorsichtig?〈 Das geschah jedoch nicht. Abgesehen davon, daß es Herrn Dr. Glatschke völlig an Humor fehlte, scheint ihn etwas ganz andres an der Antwort und dem Verhalten von d'Arthez so irritiert zu haben, daß er es vorzog, die gegebene Spur nicht weiter zu verfolgen.」(8)

この文章は『ダルテス事件』の書き出しの部分から抜き出したものである。大体、この一節に窺える文章の調子が『ダルテス事件』の地の文章の基調をなしている。時称が過去形であり、しかも三人称で書かれているため、報告者の気質や感情の動きを直接示すような文章の調子はこの一節にも見られない。ここに無理をしてノサック自身の何らかの表情を読み取るとしても、それは文章の内容とそしてこの文章に対してとられている意識の距離からくる少しとぼけたような表情くらいなものではなかろうか。文章自体は若い報告者ら

しい、報告調のいく分固苦しい文体で書かれているように思われる。

もっとも『ダルテス事件』に感情的な文章が見られないわけではない。たとえば第七章と第九章には現在形で書かれている文章があり、それは文学的な表現に近くなっている。だがその場合でもエムリッヒの言うような意味では、ノサックは一応姿を晦ませているのである。

「典型としての作家にはもはや何かを申し立てる力はない。身を引こうと、まさにそうすることで働きかけるために、そうしようとする者は洗練された方法を考案しなければならない。彼は策略で時代を出し抜かねばならない――こうしてわれわれはまた以前からなじみの、ノサックのあの中心概念のところにいる――彼は偽装（Tarnung）しなければならない。」[9] とはブレッカーの言葉なのであるが、しかし彼はこの言葉で、なぜダルテスがマイム役者であって作家ではないのかを言っているだけで、彼は、この言葉が『ダルテス事件』の実の書き手であるノサックその人にあてはまるとは、ノサックが「偽装」という方法を用い自ら韜晦を試みているとは考えていない。

しかしノサックのこうした方法がブレッカーの言うほどのものであるかどうかはまた疑問である。偽装、韜晦は何よりもまず自己保身のためのものであり、そして「韜晦」とはいえ、それは「表現」の対立概念であるというより、むしろその一形式であるにすぎない。『ダルテス事件』のノサックもだからただ隠れているだけではなく、どのように偽装し韜晦しているかにノサックは現われている。ただその現われが直接的な自己表現の形をとっていないということである。以下、簡単にダルテス、ランベールという人物を紹介しておく。その際とくに彼らの名前に見られるノサックの表現方法に注目し、そのあとでノサックが韜晦した上でどのような表現をしているのか、そしてそこに笑いがあるのかどうかを見ていくことにする。

（三）

ダルテスは外交官に似た風貌のマイム役者である。報告者はダルテスについて、彼には「どんなちょっとしたゼスチャーもどんな顔

の表情も意のままだった。あるいはより正確に言えば完全な無表情を自分のものにしていた、というのもそこにこそ彼から生まれる効果があったのである。演じられるどのシーンでも、人は笑えばいいのかゾッとすればいいのか決して正確には分らなかった。[10]」と書いている。そして普段のダルテスも舞台の上の彼と変わらない。そのいい例としては、母親が死んだときダルテスは、「母親のお棺のそばに立っているとき、どんな顔をしなければならないのかね。[11]」とランベールに尋ねたらしい。ダルテスには日常の生活も演技なのであろう。小説のなかでも彼はマイム役者にとどまっている。ランベールは以前作家であり、彼に言わせると「Kitschroman」(際物小説)を書いていた。現在の彼は図書館の司書補助員として目立たないように暮している。彼の生活で特徴的なのは、夜、室に一人でいるとき人台を相手に話をしているらしいことである。これは一種の自問自答的一人芝居であろう。そしてこれがダルテスのパントマイムの材料にもなる。だがランベールは彼の名前を公表させないので、見かけはあくまで平凡な図書館員である。『ダルテス事件』ではこのダルテス、ランベールがノサックに近い人物であるように思われる。

ところで「ダルテス」(d'Arthes)、「ランベール」(Lambert)という彼らの名前はどちらも偽名であり、それらはバルザックの小説から借用されたものである。すなわち「ダルテス」はバルザックの「幻滅」から、そして「ランベール」は『ルイ・ランベール』から取られた名前なのであるが、この登場人物命名法もノサックの巧妙な表現方法の一つであろう。ダルテス、ランベールはノサックの『ダルテス事件』では、彼らの生き方にふさわしく直接自己を語ることはしていない。が、彼らはバルザックの小説では直接自己表現をしているのではないかとも考えられるのである。報告者はダルテスの過去が見通しがたいと言う。しかしバルザックの『幻滅』を合わせ読む読者には、ダルテスのたんなる履歴とは違った意味での過去がいくらかでもわかってくるのではなかろうか。ランベールに関しても同様である。

ではダルテス、ランベールの本名はどうかと言えば、これらがまた奇妙なものである。ダルテスは「エルンスト・ナーゼマン」(Ernst Nasemann)という名で、これは直訳すれば「真面目・鼻男」ということになってしまう。「真面目」な「鼻男」とは真面目な顔をしてパントマイムを演じるコメディアンにはたしかに似つかわしい名前である。しかしこの「真面目」にはそれ以上の意味が込

められているのかもしれない。コンツェルンの会長であるダルテスの兄は「オットー・ナーゼマン」という名前である。そしてランベールの方だが、彼の本名は「ルートヴィヒ・レムケ」(Ludwig Lembke) である。実はこの「レムケ」という名前はドストエフスキーの『悪霊』に登場する人物の名前でもあって、この人物はドイツ人でもあり、また両レムケはどちらも鉄道の玩具に関連があることから、この二人には何らかのつながりがあると推測される。しかしこの推測も、もちろんそれを裏付けることはできないし、ノサックは報告者にこう書かせてもいる。「考えてもほしい、ランベールが、大成功を収めた最初の小説をルートヴィヒ・レムケの名前で出していたらと。それはよくない冗談のように聞こえたであろう。」(12) だが参考までに『悪霊』のレムケに関する次の人物評をあげておく。「・・・、フォン・レムブケー (Lembke) は平凡であり、まことに影がうすい。まさしく石器時代以来あきもせず愚鈍の相貌を呈しつづけてきた、人類そのもののような男だ。しかるに、ドストエフスキーのかれについて語る挿話は、・・・レムブケーまた侮りがたしの感をいだかせる。」(13)

だがいずれにせよ、このように登場人物の名前だけ見てもノサックの表現方法の一端は窺えよう。ノサックはダルテス、ランベールに直接自己を語らせない代りに、彼らの名前に何かを語らせようともしており、こうすればノサック自身がこれらの人物の人となりについて説明を加えなくても、そして第三者に小説のなかでいくらか的外れなことを喋らせても、彼らはいわば隠れながら現われるのである。『ダルテス事件』では、ダルテス、ランベールは彼らの偽名のなかに、そしてノサックは彼らの本名のなかに隠れ、そして現われているかのようである。

(四)

五〇年代のノサックに『弟』(一九五八年) という小説があり、そこには端役の位置しか占めていないのだが、ノサックの韜晦と表現を考察する上できわめて重要な人物が出てくる。この人物はおきあがりこぼしのような真似のできる曲芸師で、彼については、「非常に口数がすくなくて、それに、伝えたいことをすべて、けっしてすくなくはないんだけど、彼一流の芸人ふうの所作で表現する」(14)(中

野孝次訳　傍点引用者)と言われており、事実小説のなかでもほとんど口をきいていない。この人物は「カールツーバイト」(Kalzuweit)という名前であるが、これもノサック独特の命名法の現われであって、これは「kahl zu weit」というふうに解していいように思う。とすると「不毛」で「あまりにも遠い」という意味になる。では何がだれにとってそうなのか。おそらくカールツーバイトのような人間へ到る道が五〇年代のノサック自身にとってそうだったのである。この道は、本論の初めで紹介した「報告書をつくるふり」をする「サーカスの人」、六六年の「クラウン」の方からも逆に辿ることができる。そして『ダルテス事件』のマイム役者も同じ道上に位置していると思われるのだが、ただ『ダルテス事件』で見逃せないのは、五〇年代では登場人物の表現方法（生き方）でしかなかったものが、ここではいくらかノサック自身のものになっていることである。つまりノサック自身がパントマイムを演じようとしているのである。

パントマイムは無言で演じられる。『ダルテス事件』での、表現を韜晦で帳消しにするようなあの報告の仕方を考えれば、ノサック自身も無言とは言わないまでも「非常に口数がすくな」かったのではなかろうか。そして報告者は報告調の無表情な文章を書いていた。これはブレッカーの言葉に見られたとおりである。そしてこれが重要なのだが、「灰色の中立」、「無差別の単調さ」といった印象を与える報告調の文章が、実は外交官に似たダルテスの「完全な無表情」と同じ働きをしているのである。ダルテスは真面目な顔つきをしながら、何らかの役を誇張して演じる。『ダルテス事件』でのノサックもダルテスとそう違わない。ノサックは、ダルテスのような風貌をもった地の文章でまず無表情な顔をつくり、そうした上でグラッチュケ、エーディトその他の人物を少し誇張して演じているのである。ではそれはどのようにしてか。

『ダルテス事件』では登場人物が続けて長く喋る箇所が多く見られ、報告者がそれらを言葉通りに再現したということになっている。極端な例をあげると、エーディトのある話はページ数からすれば二十五ページほども続くもので、これは一応小説の会話の部分にあたるのだが、しかし聞き手である報告者は一言も口を挟まないので会話というより、むしろ一種のモノローグ（いわゆる内的独白とは違う）に近いものである。この方法を用いた表現上の試みはすでに『弟』のなかの一つの章――これは「ein empörter Monolog」

（激昂したモノローグ）と呼ばれている――にも見られるし、『わかってるわ』はその大部分が一娼婦のお喋りから出来ている。従ってノサックにとってこの表現方法は実験済みのものなのであるが、このような形で作家がある人物に喋らせる場合、彼の意識、感情の働きは当然話者の性別、年齢などによる強制的な圧迫を受け、作家の文体すなわち作家の表情は出てこない。が、しかしそれだけではない。エーディトのお喋りにおけるように、作家がある登場人物にその人物にふさわしい話し言葉で続けて喋らせることは、その人物の意識、感情の流れをいわば内側から摑むことであり、それには一時的にせよ作家がその人物になりきるほかないのである。これは役者がある役になりきるために普段の自分を殺してかかるのに似ている。ノサックはエーディトのお喋りが続くあいだは、彼の意識、感情の配線を若い女性のそれに切り変えていなければならず、この間のノサックの表現は、彼がエーディトという役を引き受け演じていると言えるのではなかろうか。事実、エーディトのお喋りには書き言葉におけるような、一度頭のなかで整理した後の静的な無表情さがないだけでなく、そこには実際の話し言葉と同様の直接性があり、この生き生きとした現実的な直接性にこそ、もちろん比喩的な意味でではあるが、ノサックの演技が見られるのである。ノサックが言語表現をしながら、先のカールツーバイトや「サーカスの人」のような身振り表現に近づくには、表情豊かな話し言葉を用いるのがもっとも有効な方法であるにちがいない。ともかくノサックはこうして登場人物を、しかも少し誇張しながら演じているのである。なおこのことは普通の会話の部分についても言えなくはない。『ダルテス事件』ではランベールも含めて、すべての登場人物がいく分戯画化されており、それが彼らのちょっとした話し振り、たとえばダルテスの妹ロッテの話し振りなどにも窺えるのである。ノサックの演技の例としては、このあとにあげるエーディトのお喋りを見てほしい。

マイム役者ダルテスは真面目な顔で人を笑わせもする。そして『ダルテス事件』ではこのこともノサック自身にあてはまる。つまり、グラッチュケ、エーディトなどの人物がユーモアを解し冗談を言うのではなくて、彼らはその話し振りからして真面目なのである。ということは地の文章の無表情に加えて、話し言葉による演技でもノサックは真面目な顔をしているのである。ではどこに笑いがあるのかと言うと、それはまず登場人物の真面目ではあるが少し誇張された話し振り、あるいはそのような話し振りと話の内容との食い違い

に見受けられる。エーディトのお喋りにこのようなのがある。

「〉Ja, und was meinen Sie, sogar neue Wäsche mußte ich kaufen. Stellen Sie sich das vor. Als ob es bei einer Beerdigung auf die Wäsche ankommt. Und als ob ich keine anständige Wäsche hätte. Das sagte ich Papa auch, doch er sagte, man fühlt sich doch ganz anders, wenn man das neue Zeug auf der Haut spürt und nichts reißen oder rutschen kann. Daß Papa überhaupt über so etwas Bescheid weiß,〈 Sogar ein Nachthemd hat er mir gekauft. Ist das nicht zum Lachen? Ein Nachthemd wegen einer Beerdigung. Es hing da zufällig. Sie hatten es auf so einem Gestell drapiert, als ob der Wind es etwas hebt. So wie sie es heute überall in den Schaufenstern tun. Ein ganz durchsichtiges Ding und enorm teuer. Es gefiel Papa, denn er hatte immer schon hingesehen, während wir die andern Sachen aussuchten, und gefragt: Und wie ist es damit? Ich hatte ihm gesagt, laß das jetzt, ich war sogar etwas ärgerlich. Aber als ich aus der Kabine kam, wo ich etwas anprobiert hatte, stand Papa mit der Geschäftsinhaberin bei dem dummen Nachthemd und befühlte den Stoff und den Saum. Und dann kaufte er es einfach, und es wurde mit den andern Sachen eingepackt.(15)〈」

これはエーディトが祖母すなわちダルテスの母親の葬儀に参列することになり、彼とそのための買い物に行ったときの話の一部で、彼女が報告者に向かってしているものである。エーディトの真剣な話し振りと話の内容とのズレは明らかであろう。ここではノサックが真面目な顔をしてエーディトの役を少し誇張して演じていると考えられる。

だが『ダルテス事件』の笑いはこれだけではない。ノサックは一見真面目な顔をしているものの、実はさらにエーディトたちの喋る言葉のなかで、また報告者の文章のなかで語呂合わせをしたり駄洒落をとばしたりもしており、笑いはここからも生まれてくる。以下にその例をいくつかあげておく。

。〉Sie hat ein paar Semester studiert.〈 Die junge Dame war Edith Nasemann. Sie saß da schon an einem Tisch und

studierte Speisekarte.[16]

。Die Frau muß Mitte der Fünfziger gewesen sein, wenn man nachrechnete, aber sie sah älter aus. 〉Verwüstet〈, wie Edith sich ausdrückte. Sie hieß Sybile Wuster.[17]

。Die alte Schachtel bildete sich ein, ich hätte immer große Sehnsucht nach meinem Vater gehabt, so wie in Romanen, und daß ich nur heulen würde.[18] (これもエーディトの話だが、数ページあとに彼女はこう言う。) Papa schickte ihr nachher eine Schachtel mit Weinbrandkirschen.[19]

この種の単純な笑いは『ダルテス事件』以前の作品にはほとんど見られないもので、従ってここにノサックの表現上の一転機を見ることも可能であろう。もっとも『ダルテス事件』にこうした笑いがそれほど多く見られるわけではない。そこにはダルテスのパントマイム同様、読者が「笑えばいいのかゾッとすればいいのか」はっきりとはわからないであろう箇所も少なくないと思われる。そしてさらに言えば、「報告書をつくるふり」というノサックのパントマイムもその試みが見受けられるとはいえ、それが成功しているわけでもない。このことは何よりも、ランベールが途中で偽名を捨て、小説のなかで死んだことに象徴されていると思われる。『ダルテス事件』には若い報告者の「報告書」のほかに「Weiterung」(後の厄介)というタイトルのランベールの遺稿のようなものがくっついており、これはノサックの直接的表現、彼の「報告書」ととれなくもないのである。ランベールはノサックの文体を屈折、変形させるような人物ではない。

しかし成功不成功は別として、このようにして『ダルテス事件』でのノサックの表現方法を見てくると、そこでの偽装、韜晦した上でのノサック自身のパントマイムの性質も、基本的なところはいくらか明らかになったことと思う。『ダルテス事件』はいわゆる実験小説の感がある。しかしたんに「小説」技法の上でそうであるのではなく、実験台にのぼっているのは、従来の「作家」概念から自らを解放しようとしていたノサック自身なのである。本論の最初に紹介した『わかってるわ』の言葉は、あの時点でのノサックの一種の決意表明のようなものであったのだろう。そして自分に対して「クラウン」という言葉を持ち出してきた六六年には、ノサックはすで

に『ダルテス事件』にとりかかっていたのかもしれない。

ノサックはある文章のなかで、「十四才のとき父の蔵書のなかでヘッベルの日記に出会った。そしてわたしはヘッベルのような男になろうと思った。[20]」と述べているが、そのヘッベルの日記にこのような言葉がある。「形式は必然の表現だ！素材は課題であって、形式が解決なのだ。[21]」あるいは、「形式は最高の内容である。[22]」これらの言葉はそっくりノサックにもあてはまると思われる。『ダルテス事件』でのノサックの場合、「素材」とは彼にとってダルテス、ランベールの生き方であり、それがノサックの「課題」でもあった。そしてその「課題」を解決するためにノサックが用いた方法が偽装による韜晦と、笑いというクラウンの方法であり、その解決においてノサック自身がパントマイムを演じようと試みたのであるから、「形式」（表現方法）は「最高の内容」ではなかろうか。「批評」、「研究」という語の概念規定を一応おくとすれば、ノサック自身あるところでこのように語っているのである。「芸術批評というものは、ある作品が、その成立の動機にふさわしい形式を見出しているか否かを探るべきものなのです。[23]」（青木順三訳）

注

(1) H. E. Nossack: Bitte kein literarisches Geschwätz —Interview mit sich selbst—, in: Über Hans Erich Nossack (edition suhrkamp 406), hg. v. Christof Schmid, 1970, S. 17.
(2) Nossack: Das kennt man, Suhrkamp Verlag 1964, S. 184.
(3) Nossack: Menschliches Versagen, in: Die schwache Position der Literatur (edition suhrkamp 156), 1967, S. 125.
(4) Max Beckmann: Tagebücher 1940—1950, Albert Langen · Georg Müller Verlag, München 1955, S. 125.
(5) Wilhelm Emrich: Le bourgeois partisan, in: Über Hans Erich Nossack, S. 142.
(6) Nossack: Der Fall d'Arthez, Suhrkamp Verlag 1968, S. 10 f.
(7) Günter Blöcker: Ein gefährlicher Mensch, in: Merkur 1968, S. 958.
(8) Nossack: Der Fall d'Arthez, S. 7.
(9) Günter Blöcker: a. a. O., S. 7.
(10) Nossack: a. a. O., S. 20.

(11) a. a. O., S. 21.

(12) a. a. O., S. 94.

(13) 花田清輝『復興期の精神』全集（講談社）第二巻　頁二二八

(14) Nossack: Der jüngere Bruder (suhrkamp taschenbuch 133), 1973, S. 219.

(15) Nossack: Der Fall d'Arthez, S. 63 f.

(16) a. a. O., S. 121.

(17) a. a. O., S. 105.

(18) a. a. O., S. 134.

(19) a. a. O., S. 140.

(20) Nossack: Der Weg nach draußen, in: Pseudoaotobiographische Glossen (edition suhrkamp 445), 1971, S. 19.

(21) Friedrich Hebbel: Tagebücher, Erster Band 1835—1839, B. Behr's Verlag, S. 302.

(22) a. a. O., S. 365.

(23) Nossach: Über den Einsatz, in: Die schwache Position der Literatur, S. 40.